

作成（2024 年度）

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	荒木 真美
所属機関名	獣医学部 獣医学科
職位	助教
在籍年	1 年

教育の責任

専門科目として生命科学実習、獣医解剖学実習、獣医組織学実習、動物形態機能学実習を担当しており、来年度より獣医形態機能学Ⅰ/Ⅱ、動物形態機能学 C/D、専門英語ⅠBを担当する。また、国試対策授業として総合獣医学演習Ⅱ関連講義、配属学生への研究指導として卒業論文Ⅰ/Ⅱ/Ⅲを担当している。解剖学や組織学は低学年の学生にとって初めての獣医専門領域であり、多くの学生が最初は興味を持って授業や実習に臨む。その解剖学や組織学への興味を持続させながら、臨床獣医学や応用獣医学につながる知識を習得させ、その上で高学年へと進んでもらい、基礎獣医学の基盤を持つ獣医を輩出することを教育の責任と考えている。

教育の理念

形態機能学（解剖学、組織学、発生学）を暗記科目と考える学生が多い。しかし、単純に暗記するには膨大過ぎる知識量であり、また暗記するだけでは今後の臨床または応用獣医科目に活かさない。したがって、臨床または応用獣医学における形態機能学の重要性を感じてもらえるような授業および実習を行うことを教育の理念とする。また、学生が将来、自分の軸になるような経験や興味を持つきっかけを与えられる教員でありたい。

教育の方法・方針

特に臨床において、形態機能学を理解していないと、症状を理解できない上、臨床的手技の誤りにもつながることから、形態機能学は非常に重要な科目であることを学生には実感してもらいたい。また、学生の積極性やモチベーションを保つため、質問しやすい雰囲気、環境づくりは徹底する。具体的には、質問に対してさらに学生に考えさせるような受け答えにする。質問して良かったと学生が思うような対応をする。また、研究室配属学生には研究だけでなく獣医肉眼解剖学および組織学の技術を学んだ獣医として社会にでてもらいたい。

【獣医組織学実習】

一般的な構造を理解した上で組織切片を観察させる。スケッチはただの模写ではないことを理解してもらう。学生が理解しやすい資料作りを心掛ける。組織写真と模式図を照らし合わせて、組織の観察眼を養ってもらう。

【獣医解剖学実習】

基本的な臨床手技や臨床症状に関連させて教えることで、ただの暗記ではなく繋がりを持たせる。アクティブラーニングとして、学生同士で教えあうことで、学生の自主的な勉強を促し、「自分も教えられるようになりたい」と思うことが刺激になる。後日知識を忘れても、教えてもらった学生に教えてもらい直すことで、お互いの復習になる。

教育の成果

【獣医組織学実習】

満足 66% + ほぼ満足 28% = 94%

「先生に質問しやすい環境で助かった。聞いたこと以上に知識を教えていただいてとても勉強になった。」

【獣医解剖学実習】

満足 92% + ほぼ満足 8% = 100%

「とても貴重な経験ができた。このことを忘れずに勉強に活かしたい。」

【動物形態機能学実習】

満足 92% + ほぼ満足 8% = 100%

「分からないことを聞けばどの先生も詳しく教えてくださって、理解が深まった。」

全体的に学生の満足度は高い傾向にあり、教員に質問しやすいとのコメントが多かった。一方で、質問をしたくても教員が足りておらず教員をもっと増やしてほしい、といったコメントもあった。

今後の目標

学生が教員に質問しやすい雰囲気はよくできていることがアンケートからうかがえる。今後もこの雰囲気の継続に努めたい。しかし一方で質問をしたい学生数が多く、質問をしたくても教員数が足りていない状況が現実である。この対策としては、教員から学生に何でも何回も教えるだけでなく、学生同士のアクティブラーニングをさらに積極的に行うことで対応したい。質問対応環境の改善だけでなく、学生の自主性、協調性を養うことにもつながると考えられる。また、研究室配属学生には、獣医肉眼解剖学や組織学の技術を学ばせたいため、標本の確保に努めたい。さらに、自分自身もさらに技術を学ぶため解剖研修会への積極的な参加を試みたい。

根拠資料

【2024 獣医組織学実習 授業アンケート】

【2024 獣医解剖学実習 授業アンケート】

【2024 動物形態機能学実習 授業アンケート】